紅

西川あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅

【Ｎコード】

Ｎ１０２８Ｆ

【作者名】

西川あや

【あらすじ】

一年前の出来事で、全てが狂ってしまった人達がいた。秋広は愛する人のために人を殺す決意をする。

鍵

風は夏から秋の香りに変わりかけていた。一年ぶりに再会する季節に懐かしさと親しみをこめて、彼女は両腕を広げた。まだ色づかない緑色の葉が、その腕をかすめた。

夕方の喫茶店で、二人の若い男が向かい合って座っていた。
「昨日の話だけど」
二十代前半だろうか、まだ少年の面影を残したスーツの青年が、声を押し殺して切り出した。
「俺、やるよ。」
「なにを？」
相手は面白いものを見ているような調子でさらっと聞き返した。色白で細く、髪は茶色…綺麗な顔だ。
「なにをやってみるのかな、秋広？」
秋広は対照的に黒髪で短髪、童顔だ。
「なにをって…ふざけるのもいい加減にしろ、唯。」
言葉を荒げる秋広をなだめるように唯は両手をあげる。
「オーケー。」
天使のような微笑…しかしその瞳の奥は氷よりも冷たく光っていた。
「もう、戻れないよ。」

彼女はしばらく風を感じたあと、両腕をおろした。そしてその場にしゃがみこみ、草に触れた。土の匂いを嗅いだ。歌を歌おうとした…歌えなかった。

「優梨。」
名前を呼ばれ、はっとして顔をあげると、声の主である男がそっと彼女の手をとった。
「涼しくなってきたから、うちに入ろう。」
彼女は男の手を強く握って立ち上がり、二人は大きな庭から家の中に戻った。

―もう一年経つんだ…

私の目が見えなくなってから。

「もう一年経つんだね。」
唯が運転する車の中で、秋広につぶやいた。もうすっかり日は暮れ、肌寒い。助手席に座った秋広は、膝の上の自分の手だけを見つめている。
「それは、なにから一年だ？」
唯は答えずにまた微笑した。月は出ていなかった。道路に車は少なく、沈黙という空間のなかで彼らの車の不快なエンジン音だけが浮き上がっているような不気味な静けさ…きっと嵐の前の静けさなのだろう、これが。
やがて、二人の車は小奇麗なマンションの駐車場に入った。
「この、マンションなのか？」
秋広は車から降りながら言った。
「普通すぎる。」
「だからいんだろう？誰も…そういうことを考えてるなんて思わない。」
エレベーターに乗り、階のボタンを押す。―13階。
「縁起担ぎか？」

「縁起でもない。」
唯は笑った。秋広は笑わずに、エレベーターのふわっと浮き上がる感覚は、自分が人間でなくなる瞬間のような気がする、と思ってすぐに忘れた。

「今回、君に頼みたいことはこれ。あんまり良くないこと。簡単に言っちゃうと人殺し。」
部屋のソファーに落ち着くと、唯は一枚の紙をテーブルに置いた。
「コーヒーいる？」
また微笑。人を殺す…まるで蚊を殺すのと同じように軽く言う。秋広は吐き気を覚えた。
「いらない。」
唯はその返事を無視して二人分のインスタントコーヒーを出した。
「覚悟はしてきたんでしょう。」
「……。」

唯の話を聞いたのは、昨日の昼過ぎだった。
「僕の頼みをきいてくれれば、君の願いを叶えてあげよう。取引だ、アキ。」

―だーれかさんが　だーれかさんが　だーれかさんが　みーつけた
小さい秋　小さい秋　小さい秋　みーつけた…
「おい、小さいって言うなよ！」
「あら、誰もアキのことだなんて言ってないじゃない！」
彼女は僕より四つ年上のかわいい女の子だった。いつも笑っていて、楽しそうで…いつも歌っていた。風が好きで、大きな大きな庭で、長い黒髪を揺らしていた。出会ったのは、僕がまだ１２歳のころの

夏だった。
その日は医者である父のかかりつけの家に昼食に呼ばれていた。食事前に僕以外で大人たちの話が始まったので、なんとなく窓の外を見た。大きな庭には青い芝生が広がっていた。そしていろんな種類の木で囲まれていた。その中に彼女はいたのだ。なにも敷かずに草の上に座り、なにか歌っているようだった。僕は耳をすましてみたが、遠くて聞こえなかった。ときどき風が彼女の髪をなびかせた。
僕は、彼女の透き通った目に不思議と魅せられてしまった。
長く彼女を見ている間に食事の準備が整い、奥様は彼女を呼びに行った。戻ってくると奥様は彼女を僕に紹介した。同時に僕のことも紹介してくれた。
「斉藤先生の次男の秋広くんよ。」
彼女は右手を差し出して笑った。
「よろしく、アキ！」

「穏やかな話だ…刺し殺すわけでも、撃ち殺すわけでもない。」
「そりゃ…」
よかった、という言葉を飲み込んで、続けた。
「…薬品か？」
「そう。」
唯は薬箱にしては洒落た小箪笥からひとつの白い粉末をとりだした。
「飲み物に混ぜると溶ける。」
秋広は唯の手の中の薬から目を逸らした。話し方は優しいが唯の声は瞳同様、残酷な冷たさがあった。空気の重さが感じられる気がした。肺に針が刺さったように苦しい。
「三人ほどで実験した結果、三人とも眠るように死んだ。安楽死と言っていい、感覚神経を麻痺させてから身体を侵食するから痛みは感じない。」

淡々と説明をする唯があまりにも自然で、現実感がなく、逆にリアルでもあった。人が死ぬなんて、本当はたいしたことのない、日常的で、ひどく退屈なことなのかもしれない。問題は死に方なのかも。…そうまで思えるほど、淡々としていた。
「だれ…」
言いかけて、秋広の声がかすれた。二度咳払いをする。
「誰にそれをのませればいいんだ？」
「その紙に書いてある。」
テーブルの上の紙を見る。　―…一条琴絵
「…いち、じょう…？」
秋広の顔から血の気が失せた。
「お前…」
手の平から水のような汗が滲む、手が震える、
「夫にも子供にも先立たれてしまった可哀想なおばあさん、」
唯は歌うように囁く。
「もう、死に時でしょう？」
「お前はっ―……！！！！」
秋広は唯の胸ぐらにつかみかかった。家具が倒れてすさまじい音をたてた。
お前は、
彼女に残されたたったひとりの肉親を、俺に殺せというのか…
「でも、彼女の目、治したいんでしょ？」

「夜食とか、いる？おなかすいてないかな。」
リビングでぼうっとしていた優梨に男が話しかけた。
「わっ…あ、もう寝るから、いいや…ありがとう、信司さん。」
信司と呼ばれた男は、庭にいたときと同じようにまたそっと優梨の手をとった。

「それじゃ、部屋に行こう？」
「ちょっと待って、おばあちゃんと話したいことがあるから、」
じゃあその部屋まで一緒に、という信司をやわらかく断って、優梨は手すりを頼りに祖母の部屋に向かった。この家にいるのは三人だけ…大きな家に、この人数は寂しかった。

彼女の笑顔は眩しかったが、当時は興味のほうが強かった。面白そうな遊び相手の出現に、僕も笑顔で握手に応じた。
「よろしくな！ゆうり！」

扉

彼女は家の中を案内してくれた。探検と言っていいくらいの広さ。使うのは一階が主で、二階なんてほとんど物置だよ！と言って彼女は笑った。たしかに二階にはいろいろなものがあった。山のように積み上げられた本、チェスや将棋などのゲーム類、高そうな絵や骨董品のようなもの、人形、

「すっげえ！」

僕は恐竜の骨というラベルのあるガラスケースに見入ったり、なぜか置いてあったわたあめ製造機に笑ったりした。

「おばあちゃんがなんでもとっておいちゃうのよ。」

彼女も笑っていた。

「こんなにすごいものがいっぱいあるのに、ゆうりは外で歌ってるほうがいいんだね。変なの。」

そう言うと少し赤くなってつぶやいた。

「見られてたのか…。」

部屋の中より、外のほうが好きなんだ。風は気持ちいいし、いろんな色があるでしょ！

「さっきは何歌ってたの？」

僕の質問に彼女は自分に驚いた顔をした。

「小さい秋見つけた！早く紅葉しないかなって思ってたから。すごいタイミングだね！」

だーれかさんが　だーれかさんが　だーれかさんが　みーつけた
小さい秋　小さい秋　小さい秋　みーつけた
目隠しおにさん　手のなるほうへ
すましたお耳に　かすかにしみた…

秋広は汗をびっしょりかいて悪夢にうなされていた。
「…呼んでる口笛」
もずの声
だめだ、そっちに行っちゃ
「小さいアキ」
見つけた？

優梨はドアをノックした。
「おばあちゃん、起きてる？」
入っておいで、という声が聞こえた。ドアをあけ、ベッドの上に座っているであろう祖母にゆっくり近づく。
「ここだよ、こっち。」
そっと手を引かれ、隣へ誘導させられる。
「どうしたの、話したいことでもあるの？」
「私、もう二十六になるでしょう。」
話をいきなり切り出す。祖母にも予想はついていたことだった。
「結婚しようと思うの、信司さんと。」

僕と優梨はとても仲良くなり、その後も優梨に会いにたびたび家に行くようになった。優梨はまだ背の小さい僕をよくからかってきた。最初は気にならなかったが、月日が経つにつれてそれが嫌になった。優梨と対等に見られたかった。

優梨は日をおうごとに綺麗になってゆく。僕が、自分のことを俺と言い出したころには、彼女を女として好きだということを否定できなくなっていた。
しかし、俺はなにも言えないまま、優梨は遠くの大学に通うために一人暮らしを始めることになった。

「元気でね、アキ。」
「ああ…。」
「なんだ、あんまり悲しくない感じ！」
優梨は笑った。季節は冬から春に変わりかけていた。彼女のすぐ後ろには、迎えのタクシーが待っていた。俺の気持ちに感づいていた優梨の両親は気を使って家に戻ってしまっていた。
悲しくないわけ、ないだろ。
「だるそうな顔しちゃって…せめて笑いなさい！」
…なんで貴女は笑っていられるの？俺と離れてもいいの？
「なんか言ってよアキー、」
好きだ。

一瞬の沈黙、
優梨は驚いた顔をして唇をおさえた。
「好きだ、優梨ずっと…」
俺は優梨を抱きしめていた。
「ずっと好きだった、」
慣れない告白をした、今さっき、無理やり重ねた唇で。
彼女はしばらく抱きしめられたままだった。桜はまだ咲いていなかった。そしてそっとつぶやいた。
「知らない間に背、ぬかれてたんだね。」
俺が腕の力を緩めると、彼女は俺を見つめた。
「もう一回、」

優梨の祖母は彼女の髪を優しくなでた。
「そうか。」
「信司さんはこの一年間ずっと助けてくれたし、優しいし、信用できる。式は挙げないで、今までどおりに生活したいの。」
それが一番、人に迷惑をかけない選択。彼女はわかっていた。

信司―坂倉信司は一年前、二十九歳の時に今までの使用人の代わりとして一条家、優梨の家に雇われた。優秀で家事もなんでもこなし、まじめで優しいことで優梨と祖母からの信用ははかりしれなかった。
それに昨晩、こんなことがあったのだ。

「いつもありがとう、信司さん。」
優梨は夕食の後片付けをしている信司の背中に言った。
「どうしたの、急に。」
手をとめ、信司は優梨の隣に座った。優梨がソファーのきしんだ方向に顔を向けると、石鹸のようないい香りがした。顔はわからないけれど、優梨のなかでは好青年の像ができていた。
「どうして、いつもそんなに優しいのかと思って。」
なにげなく口にしたその言葉に、信司はまじめに答えた。
「あなたが、好きだからですよ。」
続けて、少し触れてもいいですか、と言った。
そして、唇と唇が触れた。

昨日は最悪な日だった、
そして今日は―もっと嫌な日になるだろう。

秋広はシャワーを浴びながら目を閉じて、いろいろなことを思い出した。

優梨が引っ越してからは、年に二回しか会えなくなってしまった。夏休みと正月、それも二日か三日の滞在だった。いつも会えないぶん、その日はずっと一緒にいた。幸せだった。初めての帰省で身体を重ねた。冬に帰って来れないからといって夏休み中にクリスマスパーティーもやった。秋には馬鹿みたいに手紙に紅くなったもみじを同封した。そして、優梨の大学卒業と秋広の大学入学パーティーで約束した。

「俺が一人前の医者になったら、結婚しよう。長く待たせるかもしれないけど、絶対幸せにするから。」

「うん。」

あのころは、全てが単純だった。俺は優梨が好きで、優梨も俺が好きで、周りも祝福してくれていた。それだけだった。なのに。

一年前の秋に全てが変わった。

秋広は二十一歳だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1028f/

紅

2011年1月2日17時20分発行